

## 介護劇の歴史

平成12年に介護保険制度は医療保険制度とは異なり細部にわたり複雑なしくみを持って誕生いたしました。

そのために介護を必要とする当事者(高齢者)及び家族は耳慣れない専門用語と複雑なしくみに翻弄されることとなりました。

道海永寿会としては複雑なしくみを利用者にとってわかり易く、身近なものとして理解してもらう方法として「介護劇」という呼び名で介護の実話を基にした事例を“劇仕立て”で伝えて行く方法を思いつきました。ねらいは高齢者に自分の身に置き換えて介護保険制度を理解してもらおうというものでした。

脚本は家庭介護で繰り返されている実際の生活を取材させてもらいながら男性バージョン、女性バージョン(何れも認知症の方)を主人公とした2つを作りました。配役はもちろん職員です。笑いの中に、従来の家族介護の考え方を社会での介護という新しい意味を持つ制度として理解してもらうことの難しさと責任の重さを感じたものでした。

活動としては、老人会、婦人会、介護者教室、コミセン協議会、行政のイベントなど要請があればノーギャラで地域に出かけ啓発活動を行いました。

平成13年には750名の方に観ていただき、観客の反応から私たちの活動を将来にわたり財産として担保しておきたい意味を込めて平成14年2月には脚本の著作権を取得するに到りました。この活動は社会福祉法人としての社会的使命を道海永寿会が持つノウハウを駆使して地域に貢献できればと言う思いがありました。

5年を経過するころから“介護保険”と言う単語が皆さんの口からサッと出てくるようになって来ました。平成17年の通常国会でそれまでの“痴呆”は“認知症”と呼称の変更がなされ、国レベルで「何年後には何万人の認知症患者が発生する」というリスクデータが出されるようになってきました。一方では認知症対応が手探り状態の中で少しずつその情報が研究機関からも出されるようになってきました。永

寿会でも利用者の認知症ケアは最重点課題として研修等を重ねていました。

平成18年には高齢者虐待防止法が施行されるという背景もあり、介護のプロとしての永寿会の認知症対応のノウハウを地域に啓発するために介護劇にして示そうということになりました。介護保険制度の啓発活動から認知症対応・認知症理解のための啓発活動に大きく舵を切ることとなりました。

「世の中には同じようなことを考える人がいるもんだ」という台詞があるように認知症ケアの情報を引き出してみると全国で永寿会と同じような考えの(劇仕立てで認知症を考えてもらう手法をとっている)施設があることがわかり平成19年10月に岩手県盛岡市で開催された日本認知症ケア学会で4施設(青森県八戸市:そら寸劇隊・茨城県ひたちなか市:劇団いきり・岩手県大船渡市:気仙ボケー座・福岡県大川市:きてみて道海一座)が集まりジョイント公演が実現いたしました。

永寿会はこのようなプログラムが介護事業ではないまでも社会福祉法人としての社会的使命であるという方針の下に法人全体で笑いの中でまじめに活動しております。

### 社会福祉法人 道海永寿会

永寿園 園長 山崎 律美



## 認知症介護に関する演劇「栄吉っあんがぼけた」

急速に進む高齢社会の中、認知症という問題がクローズアップされています。

口で言ってもなかなか理解してもらえない認知症の問題をより身近に感じてもらう為に劇にしました。

栄吉の日を追うごとに進む認知症や、妻(春)の日々の介護心の葛藤が劇を通して理解して頂けると思います。

一番身近な人が認知症になった時、そのことを受け入れたくない・認めたくない・人に知られたくないなど妻(春)の気持ちが込められています。

認知症に対する偏見を取り除き地域の中で一緒に生活できるものだということが劇を通して理解できたらと思っています。

社会福祉法人 道海永寿会

